

弦巻楽団

神の子供達はみな遊ぶ

作・弦巻 啓太

★キヤスト

日之出 裕道 (ヒロポン)

鳥村 あずき (あずき)

宮永 百合子 (ミーヤ)

坂崎 兼二 (アルフィー)

中島 タケル (リーダー)

※ 登場せず

石原 美紀 科学雑誌『ガリレオ』編集部員

●シーン1

舞台上にはテーブルと椅子が4脚。
木製の、多少凝った作り。そこは喫茶店『アポロ』。
統一された美学で完成度が高い、というより、
『そこそこ趣味が良い』程度の素人っぽさの残る店。
椅子には既に一人客が座っている。鳥村あずきである。
傍らに男が立っている。店員(＝坂崎)である。
カランと音が鳴り、地味ではあるが都会から来たと
一目で分かる格好の女(＝石原)が入ってくる。

坂崎 「いらつしやいませ。」

石原 「(キョロキョロ)」

坂崎 「? ……お待ち合わせ、ですか?」

鳥村 「(サングラスを外し、立ち上がる) ……」

石原 「…あ、」

鳥村 「あの……」

石原 「…鳥村、さん……?」

鳥村 「ハイ。」

石原、席に近づく。

石原 「初めまして。主婦の鑑出版の、石原です。」

鳥村 「…どうも。」

石原 「いいかしら?」

鳥村 「ハイ、」

坂崎 「(メニューを渡し)メニューです。」

石原 「(受け取り、パッと見て即答)マンドリン。鳥村さん、注文は?」

鳥村 「もう、しました。」

石原 「それで。」

坂崎 「かしこまりました。ただ今お水お持ちします。」

坂崎、去る。

石原 「ご免なさい。随分お待たせしちゃって。」

鳥村 「いえ…。」

石原 「峠で事故があつたみたいで。」

鳥村 「事故？」

石原 「よく分からないけど、落石みたい。危なかったわ。バスに乗ってたら、直撃してたかもしれない。」

鳥村 「落石。」

石原 「命拾いしたわ。よくあるの？この辺？」

鳥村 「いえ。滅多に…初めて聞きました。」

石原 「結構大きな事故になってた。夕方のニュースで確実に流れるわ、あれ。バスぐしゃぐしゃだったもの。」

鳥村 「間一髪でしたね。」

石原 「ホント。神様に感謝しなきゃ。」

鳥村 「バス、乗らなかつたんですか？」

石原 「電車に一本乗り遅れたの。駅からタクシーで来た。奇跡。」

鳥村 「すみません、こんな辺ぴな所に呼び出しちゃったから。」

石原 「気にしないで。いいの、そんなことは。やっと取材に応じてくれたんだもの。どこにだって、出向きます。」

坂崎、水を持って出てくる。置いて、去る。

鳥村 「…。」

石原 「改めまして、(名刺を取り出し)主婦の鑑出版、『ガリレオ』編集局の石原です。」

鳥村 「…鳥村、あずきです。」

石原 「永かった、…。」

鳥村 「……。」

石原 「来てくれて本当に嬉しい。正直、土壇場で現れないんじゃないかとも思ってた。」

鳥村 「…少し、考えました。」

石原 「やっぱり?」

鳥村 「でも、思い直しました。きっと、逃げてても無駄だって。」

石原 「(ウフフ) 私がしつこいから?」

鳥村 「…困ります。主人の会社にまで…」

石原 「ご免なさい。バレちゃった?」

鳥村 「バれてませんけど…」

石原 「良かった、幸せな家庭を壊しちゃったんじゃないかって、ちょっとだけ心配してたの。」

鳥村 「…石原さん、」

石原 「あなたも強情だから。」

鳥村 「……。」

石原 「なかなか認めてくれなくて。」

鳥村 「当たり前です。」

石原 「そんなに嫌?」

鳥村 「嫌です。」

石原 「どうして?」

間。

石原 「あなたの、二十年前の話を訊かせて貰いたい。そう頼んでるだけよ。そんな過剰に反応しなくても。」

鳥村 「……」

石原 「そりや、まあ、普通の人とは違う過去かもしれないけど。」

鳥村 「…出来るだけ、考えないようにしてるんです。あの時のことは。」

石原 「思い出したくない?」

鳥村 「はい。」

石原 「(ウツ)して?…華やかな思い出じゃない?むしろ、輝かしい思い出じゃないの?」

鳥村 「…そうやって…誤解があるみたいなんですよね。あの時のことに関しては。だから…ハッキリさせたい方が良いと思ったんです。」

坂崎、ドリンクを持ってくる。

坂崎 「レモンソーダと、マンデリンになります。」(去る)

石原 「(フフ)」

鳥村 「何です?」

石原 「全然変わってない。面影ある。」

鳥村 「そうですか?」

石原 「うん。」

鳥村 「…よく覚えてますね。」

石原 「そりゃ。私もね、あなた達にかなりハマった口。毎日夢中になってテレビ見た。」

鳥村 「——。」

石原 「小学校の時よ。テレビで活躍するあなた達を見て、正直憧れた。自分とそんなに変わらない子供なの…」

鳥村 「活躍なんかじゃ。」

石原 「あなた達が、世界の中心だった。グッズも沢山買った。」

鳥村 「…………。」

石原 「超能力ノート。超能力えんぴつ、サイキック筆入れ。」

鳥村 「やめてください。」

石原 「クラス中みんな使ってた。」

鳥村 「ただの金儲けですよ。子供をターゲットにした悪質な。大体、サイキック筆入れなんて、丈夫なだけじゃないですか。」

石原 「校舎の4階から落としても壊れなかった。」

鳥村 「サギですよ。」

石原 「超能力えんぴつは、途中で色が変わるの。芯の色が。」

鳥村 「不良品じゃないですか。」

石原 「うっかり図工の絵を描く時使っちゃって。怒られた(フフ)」

鳥村 「ホント、すいません。」

石原 「いいの。全部良い思い出。“超能力開発キット”も持ってた。」

鳥村 「あんな高いもの?！」

石原 「親に泣いてねだって。」

鳥村 「でも…五万円近くしましたよアレ。」

石原 「確か。」

鳥村 「……どうでした?」

石原 「(づ)全然。才能が無かった。」

鳥村 「ホント、「免なさい」」

石原 「いいの。私は、あなた達に夢を貰ったんだから。」

鳥村 「石原さん、おいくつなんですか?」

石原 「こう見えて、二十九。」

鳥村 「じゃあ、」

石原 「あの頃は九才。小学校三年生。」

鳥村 「——。」

石原 「私はね、あなた達サイキックファイブの中でミーヤになりたかった。小さくて可愛くて。羨ましかった。」

鳥村 「ミーヤ、男の子からも人気がありました。」

石原 「あなたは? あずきさん。」

鳥村 「なんでか、おじさんばかり。おやじキラーって、みんなによく冷やかされました。」

石原 「凄かったものね、人気。」

鳥村 「——。」

石原 「物心つく頃だったから…私にとって、強烈な体験。」

鳥村 「おかしかったんですよ、この日本全体。」

石原 「最後の、解散ライブ。行きたかった…。チケットが手に入らなくて、一晩泣いた。」

鳥村 「——。」

石原 『僕たち、私たちは、普通の小学生に戻ります。』

鳥村 「——無理があつたんですよ。超能力がある、ただでアイドルなんて。」

石原 「“だけ”って。相当凄いなとよ。」

鳥村 「だからって…アイドルにする必要は無いですよ。便乗、ただの悪ノリです。歌なんて、上手いわけでもないのに。」

石原 「アイドルなんて、みんな似たようなものよ。あたし持ってた、あなた達のシングル。『サイキック銀河』！」

鳥村 「やめて下さいー！」

石原 「“ようこそ”へ。遊ぼうよサイキック」

鳥村 「石原さんー！」

石原 「名曲。」

鳥村 「…だから嫌だったんです。」

石原 「他にも、アルバムや、初回限定盤シングル、ファンクラブ会員限定シングル、ファンクラブサイキック会員限定シングル…ようするに、全部。いいカモ。」

鳥村 「……。」

石原 「ねえ、それで、どうだったの？」

鳥村 「は？」

石原 「戻れた？ 普通の小学生に。」

鳥村 「……。」

石原 「そうはいかなかった。」

鳥村 「…はい。」

石原 「でしようね。」

鳥村 「…全員、転校して、別の場所で生活する羽目になりました。」

石原 「そりゃ、可哀想だけど、仕方ないかもね。あれだけ日本を騒がせた後だもの。そうあっさり世間も引き下がらない。」

鳥村 「……。」

石原 「でしよう？」

鳥村 「…毎日、取材する記者やテレビ局のスタッフに追いかけられました。」

石原 「超能力で撃退すれば良かったのに。」

鳥村 「(キッ)石原さん。」

石原 「冗談。」

鳥村 「できるわけじゃないですか。」

石原 「…相当、苦労したみたいね。超能力少女としての経歴を消すのに。…おかげで、私も大変だった、ここまで来るのに。」

鳥村 「…石原さん、どこまで摺んでるんですか？」

石原 「何？」

鳥村 「…私達の、いま。」

石原 「他のメンバーの？」

鳥村 「…ハイ。」

石原 「…気になる？ 連絡取り合っていないの？ それぞれ。」

鳥村 「——ハイ。」

石原 「…正直に言うからね、あなた以外のメンバーの消息は杳^よとして摺めなかった。“ミーヤ”は小学校卒業を機にプツリ。“ヒロポン”は高校を退学して以降どこにいるかも分からない。“アルフィー”は最初の就職先まで。“リーダー”に至っては…あの解散ライブの後、行方不明。彼の姿を見た人間もいない。神隠しにあっみたい。」

鳥村 「……」

石原 「何か、あったの？」

鳥村 「え…？」

石原 「20年前のあの日。」

鳥村 「“何か？”」

石原 「そんなにまでして、過去を消したかったのは何故？」

鳥村 「……」

石原 「黄金時代でしょ、あずきさんの。」

鳥村 「黄金時代？」(フ)

石原 「そうよ。何一つ恥ずかしがることないわ。」

鳥村 「恥ずかしいですよ。超能力少女だなんて。」

石原 「どーして。滅多にいないよ。」

鳥村 「滅多にいないですけど。」

石原 「充分珍しい。」

鳥村 「珍しいでしょうけど。それが嫌なんです。騒がれたり、写真を撮られたり、超能力があるってことで、便利に使われたり。」

石原 「テレポーターション。」

鳥村 「……はい。」

石原 「自分以外のものも移動させられるのよね。」

鳥村 「それでよくからかわれました。旅行に連れてけ” “万引きしてくれ”
なんて無茶な頼み”とも。」

石原 「しなかったの？ そうした “悪用”。」

鳥村 「しませんよ！」

石原 「勿体無い。」

鳥村 「あれ以来、20年間チカラは使ってません。ただの一度も。」

石原 「勿体無い。」

鳥村 「これからも、使うつもりありません。」

石原 「せっかくの、人に無い能力。」

鳥村 「後悔してるんです。」

石原 「他人に力を見せたことを？」

鳥村 「ハイ。」

石原 「こーやって、20年たっても追いかけるしね。」

鳥村 「…。」

石原 「大丈夫。信頼して、今回限り。今日、あなたから話を聞いたら、私はもう二度とあなたの前に現れない。二度と付きまとわない。」

鳥村 「主人の会社に、」

石原 「押しかけない。約束する。」

鳥村 「……。」

石原 「信じて。…それじゃ、訊かせて。あなた達は20年前、何故突如解散し、表舞台から姿を消したの？ 何故、あんなに執拗に自分達の足跡を消したの？ 20年前、一体何があったの？」

声(日) 「そんな奴の質問に答える必要ないぞ。」

二人、ハツとして入り口を振り返る。
日之出(〓ヒロポン)がいつの間にか立っている。

石原 「…あなた…」

鳥村 「ヒロポン…!」

石原 「ヒ… あなた、ヒロポン?! 日之出裕道?!」

日之出 「どーして会ったりした。」

鳥村 「どーして来るの?!」

日之出 「お前一人だと漬け込まれると思ったから。案の定だ。どーして追い返さない。」

石原 「あなたたち…」

日之出 「帰ってくれ。」

鳥村 「ヒロポン。」

日之出 「もう俺達に構わないでくれ。」

石原 「…そういうこと…あずきさん、やっぱり、」

鳥村 「違うんです。」

日之出 「ホラ、帰ってくれ。俺達はもう普通の一般人なんだ、波風立てないでくれ。」

石原 「ちようど良かった。」

日之出 「早く帰れ!」

石原 「初めまして。『ガリレオ』編集部の上原です。」

日之出 「話すことは何も無い、帰れ!」

鳥村 「ヒロポン!」

坂崎 「()の間にかいて()注文は?」

日之出 「アイスコーヒー。(席に着き) 早く帰ってくれ!」

石原 「ゆっくりお話し、聞かせて貰える?」

日之出 「俺は何も喋らん。」

鳥村 「ヒロポン…!」

石原 「そう邪険にしないで。それ相応の謝礼は払います。」

日之出 「そういう問題じゃない。」

石原 「嬉しい。ヒロポンにまで会えるなんて。」

日之出 「帰るんだ。怖い目に遭いたくないなら。」

石原 「お話し、聞かせて貰える?」

日之出 「殺すぞ。」

鳥村 「ヒロポン!」

石原 「フフ、変わってない。老けてはいるけど、サイキックファイブのクールでワイルドなナスガイ、ヒロポンのまんま。」

日之出 「死にたいらしいな。ハッハッハ！ とんだ命知らずだ。」

石原 「確かに、あなたなら私を殺すなんて簡単なことよね。念力——テレキネシスで心臓を一握り。造作もないこと。証拠も残らない。」

鳥村 「石原さんも、やめて下さい。挑発しないで下さい。」

日之出 「望みどおり、天国に送ってやろうか？」

鳥村 「ヒロポンも！ 二人とも…やめて下さい。こんな所で…。」

石原 「ズルいんじゃない？ あずきさん。」

鳥村 「え…。」

石原 「知ってた訳だ。日之出さんの居場所。連絡取り合ってたのね。」

鳥村 「すみません。」

日之出 「あずきが謝ることはない。」

石原 「嘘つくことないじゃない…何か企んでる？」

鳥村 「企んでなんか。」

石原 「他のメンバーも知ってるの？ このこと。」

鳥村 「……。」

石原 「20年間、連絡を取り合ってた訳だ。常に。」

鳥村 「いつもって訳じゃ。そんな頻繁に会っていたら、すぐに周りにバレますし、」

石原 「マスコミに嗅ぎつけられる。」

日之出 「あんたみたいのがいるからな。」

鳥村 「滅多に会わないようにしてました。連絡も出来るだけしないように。」

日之出 「そう。俺達は、バレないように努力していたんだ。毎年クリスマスとお互いの誕生日とサイキックファイブの解散ライブの記念日と毎月第1第3土曜日のボ—リング大会の日以外会わないようにしてな—」

間。

石原 「——今も仲良しってことね。」

日之出 「それを…お前がぶち壊した。」

石原 「盲点過ぎて思いもよらなかった…。」

鳥村 「ヒロポン…。」

日之出 「終わりだよ。」

鳥村 「そんな大げさな、」

日之出 「どーすんだよ！ …折角、スガイボウルのゴールド会員にまでなったのに…」

石原 「ボーリング場？」

鳥村 「ヒロポン、先週パーフェクト出したんです。…勿論力抜きで。」

日之出 「キャンセル料…高えよ…」

鳥村 「ヒロポン、もう諦めよう。この一回で終わりにしてくれる、て言ってくれてるし。」

石原 「信じて。私は、かつてのファンとして、当時のあなたたちの実像に迫りたい。それだけ。あなたたちの今の生活を——壊す気なんてサラサラないし、スキャンダルにしたい訳じゃない。ただ知りたいの。あなた達が、何故 私達ファンの前から姿を消してしまったのか。」

日之出 「ものは言いようだな。」

鳥村 「ちょっと。」

日之出 「気は確かか？ 信じられるのか？ こんなヤツの言うこと。」

鳥村 「それは、」

日之出 「旦那の会社にまで連絡してきて…充分ストーカー行為だろ。既に壊されてんだよ俺達の生活は。平和な日常は。ポカポカした日溜まりは…」

石原 「表現が独自ね。ワイルドガイ。」

日之出 「上手いこと言って、俺達をオモチャにしたいだけさ、…マスコミなんて、みんなそんなヤツらさ。20年前も、今も。こいつだって、」

石原 「石原です。」

日之出 「人の痛みも分からない人間さ。」

石原 「ひびい。」

日之出 「どーせまともな人間じゃない。」

石原 「失礼ね。私は、あくまで真ツ当な人間よ。平凡も平凡。」

日之出 「…『あなた達と違って』そう言いたいのか？」

石原 「(フ) そんなことは。」

鳥村 「やめて、ヒロポン。」

日之出「お前…」

鳥村「いつかは、こんな日が来るの、覚悟してた。」

日之出「あずき、」

鳥村「きつと、ケジメをつけるべき時なんだよ。」

日之出「良いのか、」

鳥村「私ね、もう、正直疲れた。逃げてるのも、抱えてるのも。…なら、いっそ洗いざらいぶちまけた方が、良い気もするの。」

日之出「あずき、考え直せ。」

鳥村「みんなに迷惑はかけないから。」

日之出「忘れたのか、俺達が受けた仕打ちを！」

鳥村「！」

石原「あなた達が受けた、仕打ち？」

日之出「…真つ当な、平凡なあなたには想像もつかないだろうな、俺達みたいな、特別な能力を持って生まれて来てしまった人間の、苦しみなんて。」

石原「…いじめられた訳ね。」

日之出「…そんな生易しいものじゃない。」

鳥村「初めて力に目覚めたのは…小学校に上がる頃でした…。学校に行く途中、トイレに行きたくなった私は、焦って、必死に、“トイレトイレ”と念じながら走りまわった。すると——次の瞬間、学校のトイレにいました。テレビでディズニールランドを見て、“行きたい”と思ったら、次の瞬間ディズニールランドにいました。それだけじゃありません。欲しいと思ったものは、気がつくと言ランドセルの中にありました。お菓子、おもちゃ。友達が持ってたアクセサリーまで。慌てて、こっそりその子の机に戻しました。それが…自分の“能力”だと気がつくのに時間は掛かりませんでした。」

石原「学校では…バレなかった？」

鳥村「冬眠してるはずの亀が教室に現れた時は、パニックになりました。」

石原「でしようね…。」

日之出「どうしてそんなことを…！」

鳥村「会いたかったの…！」

石原「他には？」

鳥村 「…クラスメートの、よし子ちゃんが、ある日矯正器具をつけて来て…」

石原 「まさか…」

鳥村 「よし子ちゃん、パニックになってました。」

石原 「よし子ちゃんだけ、二度もパニックに…。」

日之出 「どーしてあんなものを…!」

鳥村 「羨ましかったの…アンドロイドみたいで!」

石原 「…で、気付かれた。」

鳥村 「ハイ。」

石原 「苛められた。」

鳥村 「…ハイ。靴を失くされたり、ランドセルを捨てられたり、すぐ取り返せるんですけど。悪口も、散々言われました。“サイキック野郎” “超能力バカ” “超能力ブス” “ペチャパイ”」

石原 「え?」

鳥村 「“超能力バケモノ” “超能力怪物” “超能力キモい” “ペチャパイ”。」

石原 「ペチャパイは関係なくない?」

鳥村 「(動揺をこまかし) “超能力ペチャパイ”」

石原 「ああ…、そう。」

鳥村 「“私の歯を返せ!”」

石原 「よし子ちゃんね、それ言ったの。」

鳥村 「“ファッキン・ゴ…ホーム”」

石原 「…留学生在いたの?」

鳥村 「一人。(!)どーして分かるんですか?!

石原 「何となく。」

日之出 「!まさか…!いつも能力者か?!

鳥村 「いえ。もしか、目覚めが…!」

石原 「違う。」

鳥村 「石原さん、遂に来たんですよ! 開発キットの効果が!」

石原 「違うから! 良いから! 私のことは。…それで?」

鳥村 「石をぶつけられたり、仲間外れにされたり…先生でさえ、気味悪がって

助けてはくれませんでした。腫れ物に触るみたい…。」

石原 「仕返しはしなかったの？ いじめっ子たちに。どこか遠い国に飛ばしたりとか。」

鳥村 「石原さん！」

石原 「だって…そんな苛められたら…。」

鳥村 「しませんよ。そんなこと。する訳ないじゃないですか。」

石原 「ご免ご免。」

日之出 「ホラ見ろ、分かるわけ無いんだよ、俺達のことなんか。弱者の、虐げられた人間の気持ちなんか、」

石原 「分かるわ。」

日之出 「何を根拠に、」

石原 「私も、苛められてたから。」

間。

石原 「分かっているつもりよ。虐げられた人間の気持ち。もともと、私が苛められた相手は…家族だけだね。私は…あなたみたいな力があつたら、きつと飛ばしてた。グリーンランドとかに。」

日之出 「あんた…」

鳥村 「石原さん…」

石原 「信じて。あなた達の心の傷を、えぐるような記事にはけしてないから。絶対に、現在のあなた達に繋がるような情報は載せない。——話して。それで、あなたが超能力少女であることが噂になって、やがて、プロデューサーの耳に入り、あなたは、スカウトされた。」

鳥村 「コクリ」

石原 「小学五年生の時ね。そして、同じように日本全国から集められた超能力少年少女5人で、世界でも初の超能力アイドル、“サイキックファイブ”が結成される。メンバーは…“物体発火”のリーダー・中島タケル、“空間移動のスペシャリスト”鳥村あずき、“千里眼”のアルフィーこと坂崎兼二、“テレキネシスのエキスパート”ヒロポンこと日之出裕道、“サイコメトラ”のミーヤこと、」

声(宮) 「宮永百合子」

三人、ハッとして入り口を見る。
いつの間にかそこに、お忍び芸能人風の宮永が立っている。

鳥村 「あなた…!」

日之出 「お前…。」

宮永 「ひどいんじゃない。私だけ仲間外れにして。」

石原 「あなた…。」

日之出 「知らせたのか?!」

鳥村 「まさか。」

宮永 「見くびらないでよね。私の力を持ってすれば、今日、ここに來ることなんて簡単なことよ。」

鳥村 「読んだのね…私の心を。」

宮永 「ご免なさい。」

石原 「え…もしかして…。」

日之出 「元気そうだな。」

宮永 「ヒロポンも。(サングラスを外し)先週のパーフェクト以来ね。」

石原 「あなた…。」

宮永 「初めまして。元サイキックファイブメンバー、宮永百合子です。」

石原 「ミーヤ?! あなた、ミーヤ?!」

宮永 「よろしく。」

石原 「そんなあ!!」

宮永 「?! そんな?!」

鳥村 「駄目よミーヤ! その人の心を読んじゃ!」

宮永 「なんで?」

鳥村 「恐ろしいことが起こってるわ。」

石原 「ミーヤ…あなたが…あのミーヤ。」

宮永 「感激されちゃった。声も出ないみたい。」

日之出 「何しに來た。」

宮永 「決まってるじゃない。取材に答えてあげないと。私だって当事者なんだから。現場にいた生々しい証言があつたほうがこの人——石原さんも嬉しい

「でしょっっ。」

日之出「それだけか…?」

宮永「何?」

石原「え…あなた…アレ? あなた…テレビに出てるでしょ? 今も…。」

宮永「(フ) 分かつちやった?」

石原「え? ちよつと待つて?! 確か、たまにテレビで見る、グルメリポーター、」

宮永「大食いのミーヤとも呼ばれてる。」

石原「えー! あなたが?! “じゃんじゃん持つてきて” のあなたが?!
あのミーヤ?!」

宮永「(カッコ良く)お替わり、じゃんじゃん持つて来て!」

石原「本物だ…間違いない…。そのミーヤが、サイキックファイブのミーヤ?!」

宮永「気付いて欲しかった…」

石原「だって…違いすぎる!」

宮永「同じミーヤなのに。」

石原「繋がらない!」

日之出「皮肉なもんだよ。俺やあずきは、住む場所を変え、時には名前を変え、
「こそそ人目を忍んで暮らして来たってのに…こいつは堂々と、あの頃の
名前のままテレビに出てるってのに…誰一人気付かないんだ!」

宮永「スタッツに気付かれた事もないわ。」

鳥村「…見事な変装。」

日之出「改造だよ。」

石原「驚いた…あなたが…あのミーヤだなんて。光栄です。あなたにもお会い
できるなんて。」

宮永「私も。是非会いたかった、あなたのような人に。」

石原「え?」

日之出「ミーヤ、やめろ、」

宮永「どうして? 超能力者なのに分からないの? これはチャンスじゃない。」

鳥村「ミーヤ、」

日之出「お前、やっぱりそのつもりで、ぐっ! (体の動きが止まる)「

石原 「え？」

鳥村 「ミーヤー」

宮永 「(ちらちらん)」

日之出 「くっ…やめろ…やめるんだミーヤ…」

宮永 「(ちらちらん) ヒロポンは黙ってて。」

日之出 「(ジリジリ後退する) くそ、ふん！(抵抗。少し盛り返す)」

鳥村 「やめて二人ともー」

宮永 「(ちらちらん) ふぬー…！！」

日之出 「うわあああ！！(飛ばされる)」

鳥村 「ヒロポンー」

宮永 「あなたが私に敵うわけじゃないじゃない。テレキネシスしか使えない、落ちこぼれのヒロポンが。」

石原 「今の…ひよっとしてー」

宮永 「テレキネシスなんて初歩中の初歩。スプーン曲げみたいなものよ。メンバー全員出来た。ヒロポンはそれしか出来なかったから…ヒロポンだけが出来るってことにはしよってリーダーが決めたの。」

日之出 「畜生。」

鳥村 「大丈夫？」

日之出 「パワーアップしてやがる。」

宮永 「テレキネシスのパワーは能力者の体重に比例するのよ。忘れた？」

石原 「…凄い。」

宮永 「どう？ 直接 “力” を目にした感想は。良い記事書けそう？」

石原 「え…？」

鳥村 「ミーヤ、」

石原 「ミーヤさん、じゃあ あなたは、」

宮永 「協力させて貰うわ。勿論。何でも質問して。」

石原 「ありがとうー」

日之出 「ちよつと待てえー」

鳥村 「ミーヤ、よく考えてー」

宮永 「何を?! (くわっ)」「

日之出「!ぐっ…(固まる)早まるな、ミーヤ…ぐは!(倒れる)」

宮永「ただし、条件がある。」

石原「条件?」

宮永「私を実名で、顔写真付きで記事にすること。どう?」

石原「へ…私は、構わないけど。全然!そんなの、こっちだってむしろ都合良い。」

鳥村「ミーヤ、」

宮永「大丈夫、私だけ。問題ない。」

鳥村「きつとバレル!私や、ヒロポンや、アルフィーの周りにだってすぐにマスコミが集まり出す。」

宮永「バレないって。」

日之出「立ち上がりながら(ミーヤ、どうしちゃったんだよ? 忘れたのかよ?俺達が受けた仕打ちを。お前だって言ってたじゃん、"こんな生活まっぴらだ"て。」

宮永「…確かに言ったわ。」

日之出「超能力者、てことで奇異の目で見られたり、恐れられたり、サインを求められたり、写真を撮られたり、スプーン投げつけられたり、珍獣みたいな生活、もう"免だ、て言ってたじゃねえか!"」

宮永「その通り。」

間。

宮永「確かに…良いことばかりじゃなかった。むしろ、苦い思い出ばかり。私達は、体の良い珍獣だった。人気者なんかじゃない。大人達の手の上で踊らされてただけ…。」

石原「そんな…あなた方は、間違いない、本物のアイドルだった。私の世代の子は、みんな、あなた達に夢中だった。」

宮永「嘘ですよ。」

石原「ホントよ。」

宮永「アイドルなんかじゃない。」

石原「立派なアイドルよー!」

宮永「アイドルは! スプーン曲げながら歌ったりしないんです…!!」

鳥村 「(泣き) う…」

宮永 「スプーン曲げなくても、本物のアイドルは、アイドルなんです…!!」

石原 「…そこが良かったのに…。」

宮永 「サビの所でスプーンが曲がるように、力を使いこなす特訓をさせられました。」

石原 「見事だったわ。毎回。」

日之出 「なのに… 世間のヤツら、トリックだなんて言いやがって。」

鳥村 「抗議もたくさん来ました。」

石原 「イカサマだって?」

鳥村 「はい。それと、全国のスプーンメーカーからと消費者協会から。」

日之出 「忘れてないんだろ。あの屈辱。あの痛み。俺達は、やっと、あの忌まわしい過去を吹っ切ったんじゃないか。やっと、サイキックファイブを過去に追いやることが出来たんじゃねえか!」

宮永 「そうね。忌まわしい過去。」

日之出 「なら分かるだろ。俺たちのやるべきこと。(石原に) さあ早く帰ってくれ。聞いただろ、あの時のことを俺たちはもう思い出したくないんだ。そっとしてしてくれ。古傷を抉るような真似しないでくれ!」

宮永 「思い出したくない… 善だった…。」

日之出 「…ミィヤ?」

宮永 「不思議ね…なのに、忘れられなかった。苦しくて、辛くて、思い出したくない記憶ばかりのはずなのに… 心から離れないの。」

鳥村 「…何が?」

宮永 「あのスポットライト…あのファンの歓声。私達に向けられた羨望の眼差し…! 浴びたい…! もう一度、大観衆の待つステージに立ちたい…!」

鳥村 「ミィヤ、」

宮永 「気がつくと、カレー屋のスプーンを全部曲げてた。部屋に帰ると、あの頃の衣装で『サイキック銀河』を口ずさんでいた…!」

鳥村 「あの頃の衣装?!」

日之出 「馬鹿な!」

宮永 「新調したのよ。3」にね…」

鳥村 「…わざわざ…」

宮永 「馬鹿みたいでしょ？ 自分でも分かっている。でも駄目なの。染みついて、突き刺さって、心から離れないの……」

石原 「…それで…タレント活動を…」

日之出 「まさかお前それで、(カク)おー！ おー！
(とか言いながら変なポーズで固められる)」

鳥村 「違うよ。それは勘違いだよ。美化しすぎだよ！」

宮永 「そんなことない！ うっん、それでも良いの。」

石原 「…なるほど、それで、取材に協力してくれるってわけね。」

宮永 「あなたにだって、悪い話じゃないでしょ？」

日之出 「早まるな、ミーヤ、」

宮永 「ヒロポン、しっぺい。」

日之出 「取り返しのつかないことになるぞ！」

宮永 「どいっ、」

日之出 「どかんー！」

宮永 「(くわっ)」

日之出 「あひゅーん (気絶)」

石・鳥 「え?!」

鳥村 「ヒロポン?! ちょっとヒロポン?! しっかり！ しっかり！ 誰か！」

坂崎、駆け込んで介抱。

宮永 「チャンスなの。…もううんざり。こんな、地方でしか活躍できないグルメタレントでいるのは。超能力を封印したら…誰も見向きもしてくれない、珍獣ですらない…餃子を二十人前食べれるだけの、ただの人。」

石原 「それも、ある意味超能力だけだね。」

宮永 「お世辞はよして。」

石原 「いや、お世辞では。」

宮永 「そんなの超能力じゃない…ただの胃下垂よ！」

鳥村 「泣」う…」

石原 「なんで泣くの?！」

宮永 「さ、取材を始めましょう。」

石原 「——ひとつ、良い。」

宮永 「何？」

石原 「どーしても確かめたいことがあるの。」

宮永 「どうぞ。」

石原 「リーダーは、今どこで何をしてるの？」

間。

石原 「何？この沈黙。やっぱり知ってるのね、」

日之出 「う…」（目覚めだす）

宮永 「知らない。」

石原 「もう遅い。」

鳥村 「石原さん、そのことは、」

石原 「どうして答えられないの？ お互い協力しましよ？ 私は記事にしたい。あなたは記事に取り上げて貰いたい。」

宮永 「…どーして知りたいの？」

石原 「あなた達、リーダーとだけ不仲だったよね、当時。」

間。

宮永 「どこからそんな情報。」

石原 「噂よ噂。当時のファンの間で流された。サイキックファイブの突然の解散は、リーダーと、他の4人のメンバーとの対立が原因だって。」

間。

石原 「否定しないんだ。」

宮永 「…仲が悪かったのは、認める。」

石原 「やっぱり。」

鳥村 「でもアレは、リーダーが悪いんです。」

石原 「そうなの?」

日之出 「自分の能力を良いことに…」(ダメージが残っている)

石原 「“物体発火”。」

鳥村 「気に喰わないスタッフや、私達に火をつけて脅したり、遊んだりしました。」

石原 「! 本当?!」

鳥村 「当時はリーダーが群を抜く能力者だったから…誰も逆らえなかったんです。」

石原 「驚いた…一番童顔で、純粹そんな感じだったのに…。」

日之出 「上つ面だけさ!」

宮永 「私も、何度となく肉体関係を強要された。」

石原 「そんなことまで?! ていうかあなたと?!」

鳥村 「石原さん、」

石原 「あ、そうか…」

宮永 「誰も逆らわない」とを良いことに…悪魔でした。」

石原 「…それで解散?」

鳥村 「人気も、下降線でしたし…」

石原 「本当に、そんな理由?」

鳥村 「は?」

石原 「…今イチ、信憑性に欠けるわね、その話。」

鳥村 「真実です。」

石原 「…ファンの中にね、こんな噂もあるの知ってる?」

宮永 「また噂?」

石原 「リーダーと、他の4人の仲は不仲だった。…それが決定的になったのは、リーダーがサイキックファイブの超能力のトリックを暴露しようとしたからだ。」

鳥村 「違う!」

宮永 「何ですって?」

石原 「本当のところ、どうなの?」

日之出 「この野郎(フラフラ立ち上がる)」

坂崎 「ああ! 危ないですよ!」

宮永 「トリック…?」

石原 「だって噂。」

宮永 「見たでしょ、たった今、」

石原 「テレキネシス…二人のお芝居かもしれないし。」

鳥村 「石原さん…」

石原 「ちよっと、そんな敵意剥き出しにしないで。私は、真実が知りたいだけ。どうなの？ 本当に、あなた達トリックだったの？ あの数々の超能力は、全部巧妙に仕掛けられたものだったの？」

宮永 「そんな訳ないでしょ。」

石原 「じゃありーダーは今どこにいるの？」

宮永 「リーダーは関係ない。」

石原 「どうして？ だって、リーダーの証言も聞いたほうが公平じゃない。トリックでも、イカサマでも無いなら教えられるでしょ？ それが解散の理由じゃないんなら、教えられるはず。」

間。

石原 「…さっきの、あなた達のお話、今イチ飲み込めないの。あのリーダーがそんな人だったとは。大体、どれだけリーダーが強力なエスパーだったからって、4対1でかなわないなんて考えにくいわ。——噂ではね、続きがあるの。あの解散ライブ以降、リーダーの姿を見た人間がいないのは、トリックを暴露しようとしたリーダーを、他の4人が共謀して殺しちゃったからだ、て。」

三人 「(ハ…)」

鳥村 「違います…」

石原 「証明して。」

日之出 「そんなことするわけねえだろ！ 殺すぞ！」

石原 「そうやって追い詰めたんじゃないの？ 20年前、あの解散ライブの日！ そうやってあなた達は自分達のイカサマを守るために！！ あひゅー(パタリ)」

間。

鳥村 「え… 石原さん？ ちよっと、石原さん！」

日之出 「…またやったのか、ミーヤ、」

宮永 「まさか。一般人に向かって。あんたじゃないの？」

日之出 「もう今日はそんな力残ってねえよ。」

宮永 「じゃあ…」

坂崎 「(立ち上がる)…。」

三人 「…アルフィー、」

坂崎 「ご免…。つい、カッとなっちゃって。」

日之出 「つい…じゃねえだろ。」

坂崎 「だって…あんな言い方。俺達のことを、イカサマだなんて…!」

日之出 「だからって…殺してないだろうな？」

鳥村 「大丈夫、息してる。気をつけて、アルフィー。」

宮永 「そうよ。一般人に力を使うなんて。」

日之出 「お前もだよ。もうやめようぜ。反則。念力でヒトの頸動脈一瞬塞ぐの。危なすぎる。」

宮永 「お遊びでしょ。」

日之出 「限度がある。」

宮永 「大体、あんた達三人がいけないのよ。あたしに内緒で取材を受けようとするから。」

日之出 「教えたなら絶対喜々として応えようとしただろ、ミーヤ。」

宮永 「当たり前じゃない!」

鳥村 「ヒロポン。もうしょうがないよ…知られちゃったんだから、今更。」

日之出 「くそ!」

坂崎 「だから…最初に失敗しなきゃ良かったんだよ、ヒロポンが。」

日之出 「俺のせいだよ!」

鳥村 「そうね。」

坂崎 「威勢良く出でったくせに…。」

日之出 「だって、普通乗ってると思うだろ?! バスに。」

鳥村 「俺に任せろ、てテンションでね、」

日之出 「あずき、」

坂崎 「ヒロポンはさ、台詞がカッ!」良いだけで行動が伴ってないんだよ。」

鳥村 「石原さんにも…何アレ? 『殺すぞ』って…全然効いてないじゃない。見透かされてるのよ。」

日之出「だつてよ…」

鳥村「何で入って来るのよ。私が適當にはぐらかして帰すつもりだったのに…」

日之出「あずき一人に任せるほうが心配だろ？」

坂崎「俺だっているよ。」

日之出「アルフィーがいたって！ 何できるんだよ、半端な透視しかできないだろ?!」

坂崎「半端なんかじゃー!」

宮永「まったく、馴れない悪巧みするからこうなるの。どーすんの？ この子。もう適當に誤魔化すわけにはいかないわよ。」

三人「……。」

宮永「ちゃんと説明しないと…。納得しないでしょ？ このまま。」

三人「……。」

坂崎「嬉しそうだな。」

宮永「私？」

日之出「こうなることが、ミーヤにとっては願ったり叶ったりだもんな。」

坂崎「リーダーのこと、どう説明するんだよ。」

宮永「そこは適當に…」

坂崎「ごまかせるか？ …テーブルだろ、俺達の。」

宮永「みんなさ… 本当にこのままで良い？」

坂崎「このまま？」

宮永「本当に、今の自分に満足してる？ 今の環境に。今の生活に。」

鳥村「してる。」

坂崎「俺もだ。自分の店を持って、静かに暮らす… 俺はさ、やっぱりこうして地味に生きてくのが性に合ってたんだよ。」

日之出「もう未練はねえよ。過去は過去なんだから。俺達は、今を生きるんだから。」

宮永「ちよつと…情けないこと言わないで！ 不甲斐ない！ みんな…本当に忘れちゃったの?! あの私達を待つ観客の声！ 熱い声援！ 魂の連帯！ あんなに…誰かに必要とされたことはないわ!!」

坂崎「そりやそうだけど、」

宮永「私達が今、こんなにも燻ぶってるところを見たら、あの頃のファンが悲しむ！ きつと、失望する！ サイキックファイブを信じてくれたファンを、裏切ること

「なるのよー」

日之出 「おめーの体型が一番裏切ってるだろ。」

宮永 「(くわ)」

日之出 「あひゅー(パタリ)」

鳥村 「ちよっと！ ミーヤー！」

坂崎 「別に、俺達燻ぶってるわけじゃないだろ。」

宮永 「アルフィー、この店、繁盛してる？」

坂崎 「何だよ突然。」

宮永 「答えて。」

坂崎 「見ての通りだよ。閑古鳥さ。」

宮永 「あずき。」

鳥村 「何？」

宮永 「旦那とは上手くいってる？」

鳥村 「(ー) 勿論。怖いくらい順調。」

宮永 「…そう、部下のOLと温泉旅行に…」

鳥村 「！ 読まないで！」

宮永 「…しかも一年以上前からの関係…妻である自分とは半年もセックスレスなのに…」

鳥村 「ちよっと！ 勝手に人の心を…！ 無になれー無になれー」

宮永 「みんな分かってるんでしょ？ …あの時のほうが輝いてたって。あの時のほうが求められてた、て。あの、サイキックファイブの一員だった時代が、自分達の黄金時代だったんだ、て。」

二人 「…。」

宮永 「もう一度、誰かに必要とされたくはない？ 沢山の人達の前で、輝いていたくない?! 私は輝きたい！ もう一度光ってみたい！ 光りなさい！ 私！」

二人 「……。」

宮永 「ね？」

鳥村 「ミーヤ、」

宮永 「歌おう！ サイキック銀河！」

二人 「それは嫌。」

宮永 「なんでよー！」

石原と日之出、回復する。

石原 「う、うん、」

鳥村 「石原さんが、」

日之出 「くそ、おいミーヤ、」

宮永 「しっ」

坂崎 「何か持つてくるか？」

鳥村 「…大丈夫？ 石原さん。分かる？ 何か飲む？」

石原 「大丈夫…（気付き、皆からハッと離れる）」

鳥村 「…驚かせて、ご免なさい。」

石原 「…そういうこと…。なるほど、マスターもグルだったってこと…てことは…
あなたが、『アルフィー』。」

坂崎 「坂崎、兼二です。」

鳥村 「騙し討ちみたいな真似してご免なさい。ホラ、アルフィーも、」

坂崎 「すみません…思わず力を。」

石原 「あなた達…」

鳥村 「本当、謝ります。そんなつもりじゃなかったんです。」

宮永 「お詫びに、何でも質問に答えるわ。」

鳥村 「ちよつとミーヤ、」

宮永 「さ、何でも訊いて。」

日之出 「勝手な」とすんなよー」

宮永 「何よー！（）モチヤモチヤ（

坂崎 「ちよつと、みんな！ ウチの店で暴れないでくれよ！！」

石原 「なあるほど。やっぱり、そういうことだったわけ。」

間。

鳥村 「やっぱり…」

石原 「私の睨んだ通り。」

日之出 「何だ？」「いつ、何言ってるんだ？」

鳥村 「石原さん…?」

石原 「すっかり騙された。そう、あなたがあの千里眼のアルフィー…あなたのお店だったの…?」
「ううりて他の客がやってこないはず。」

日之出 「なめるなよ。これで通常営業だ!」

石原 「…そんなにまでして隠したかったわけだ。自分達のペテンを。」

間。

四人 「へ?」

石原 「私の取材を受けて、20年前の超能力のイカサマがバレるのを恐れて…」

坂崎 「イカサマなんかじゃ、」

鳥村 「アルフィー!」

石原 「やっぱりね。あなた達ほとんどインチキアイドル。自分達の手でそれを証明してくれた。」

宮永 「何言ってるの? 身をもって体験したでしょ? 現に気絶させられたじゃない、今。」

石原 「(フ) この店のマスターなら、何か混ぜるのも容易いんじゃない?」

坂崎 「もう一回やろうか?」

鳥村 「馬鹿、」

日之出 「何? どーゆうことだ?」

宮永 「あなた…」

石原 「噂は本当だったのね…あなた達は超能力者なんかじゃなく、ただの一般人。私と同じ。20年前のあの活動は、全部、みんな仕組まれたインチキだったのよ!」

宮永 「違う!」

石原 「汚い真似して。」

宮永 「私達は本物!」

鳥村 「そうよ!」

坂崎 「あずき?」

鳥村 「…あなたの言う通り私達は超能力者なんかじゃない。真ッ赤な偽者。」

日之出 「おいあずき、」

宮永 「ちよつと何言ってるのあんた。」

石原 「認めた。」

鳥村 「ええ。私達はただの一般人。平凡も平凡。…だから、記事にする価値なんかない。」

石原 「え…。」

鳥村 「そういうことです。だから…帰って下さい。」

宮永 「何言いつのあずき！ 違う。私達は本物。インチキなんかじゃない！」

坂崎 「実はそうなんです。」

日之出 「ハイ、僕達ただの人間です。」

宮永 「あんたたち！」

坂崎 「あれは全部トリックだったんです。」

日之出 「芸能界の大人達に踊らされてたんです。」

坂崎 「僕達もあわれな被害者なんです。」

日之出 「おーいおいおい。」

宮永 「やめなさい！ 白々しい嘘！」

鳥村 「…分かっていただけですか？ 石原さん。私達は、いわば、世間の波に弄ばれた、憐れな子羊なんです。あの当時、小学生だった私達には、あーするしかなかった。素直に大人達の言うこと聞いて、人形になって。」

日之出 「…ずっと、後悔してました。」

坂崎 「CD出したり、コンサート開いたり。」

日之出 「ファンの女の子に“超能力だよ”って言ってお尻を触ったり、」

石原 「そんなことまで?!」

坂・日 「今思うと、恥ずかしくて死にたいです。」

宮永 「何言ってるの?! どうしてそんな嘘つくの！ 違うのよ、石原さん。こんな茶番信じゃないでね。私達は真正銘の本物。エスパー！」

三人 「本当にすいませんでした。」

宮永 「ちよつとー！」

石原 「…よく、打ち明けてくれたわね。」

宮永 「石原さん！」

坂崎 「なんだか、肩の荷が下りた気がします。」

石原 「そう。なんせ、20年だものね。」

日之出 「ハイ…ずっと辛くて…苦しくて…」

石原 「うんうん。ずっと抱えてたんだものね。誰にも話せず。」

鳥村 「ハイ…分かって頂けましたか？ 私達は、ただの一般人なんです。」

坂崎 「ありふれた存在です。」

日之出 「生きる価値のない虫です。」

宮永 「言い過ぎー！」

鳥村 「なので…記事にさせていただけるようなことは何も…お引取りいただけますか？」

日之出 「ご期待に添えずに、申し訳ありません。」

坂崎 「…またのご来店をお待ちしております。」

石原 「…嫌よ。」

間。

三人 「…へ？」

石原 「…まさか。何言ってるの？ …帰るわけないじゃない。」

鳥村 「だから、石原さん、」

石原 「トリックだったんでしょ？ イカサマで、インチキだったんでしょ？ 20年前の一連のブームが全部。…帰るわけ無いじゃない。記事にしないわけ無いじゃない。大スクープよ！！ 大スキャンダル！」

日之出 「くそー！」

坂崎 「逆効果だった！」

鳥村 「石原さん！」

石原 「フフフ…やっと認めたわね。インチキだって。イカサマだって。あーすっきりした。そうよね。当たり前じゃない。超能力なんて、あるわけないじゃない！ あつたら世界の王様になってるわ！」

坂崎 「それは無理だと思っけど…。」

宮永 「石原さん、じゃあ、」

石原 「記事にしますよ。勿論！ 巻頭特集。20年前、日本中が引っかけた大ベテン。その真相、たっぷり書かせて貰うわ。」

鳥村 「違うんです！」

石原 「何が？」

鳥村 「その…だから…私達…ニセ者ではないんです！」

石原 「(フ) 今更。」

坂崎 「嘘じゃない！ 僕たち、本当に超能力が使える！」

日之出 「そうだ！ どこからどう見ても特殊能力者だろう！」

宮永 「はい。私達は、大人達に踊らされた、憐れな被害者です。」

日之出 「くそ、俺達のセリフを！」

宮永 「全部仕組まれてました。タネも仕掛けもありました。私達は、メディアに操られた、間抜けなヒロでした。」

鳥村 「石原さん、違うの、さっきのは誤解、」

石原 「もう遅い。絶対記事にします。」

宮永 「そう。お願いね、顔写真付きででかく、実名と、今の事務所のメールアドレスも載せて。」

石原 「良いんですか？」

宮永 「勿論！」

石原 「…大変なことになりますよ。」

宮永 「それを望んでるの。私はもう一度脚光を浴びたいの、ステージに立ちたいの！」

石原 「…場合によっては、裁判所の証言台の上ですよ。立つの。」

間。

宮永 「…へ？」

日之出 「決まってるだろ。」

坂崎 「20年前の、あの日本中を巻き込んだブームが全部。ベテンだと分かったら、当時のファン、レコード会社、玩具会社、トミィ、ナムコ、超能力開発キットを作ったタカラ、文房具メーカー、テレビ局…スプーンメーカー…ありとあらゆるところから抗議と、損害賠償が起こされるだろうね。」

宮永 「…そんな！ だって…20年前よ?！」

石原 「幸か不幸か、サイキックファイブの信者は一途でね。ファンクラブが正式に解散したのは3年前。会報も出続けたわ。年2回。」(取り出す)

鳥村 「17年も…!」

石原 「メディアの影響力は恐ろしいわね。」

宮永 「…そんな…。」

間。

宮永 「本物です。」

石原 「手遅れ。」

鳥村 「本当に、本物なんです!」

石原 「一回認めたくない! 大丈夫、現在のあなた達に結びつくようなことは一切掲載しないから! 写真も目線を入れて。」

宮永 「だからそれは誤解!」

坂崎 「僕達、本当に超能力があるんです!」

鳥村 「石原さん、信じて下さい。」

日之出 「怖い目に遭いたいのか? …殺すぞ。」

石原 「おーこわ。」

宮永 「見える。全然怖がってないわ!」

石原 「そんなにビビらないで。何なの? ニセ者だと言ったり、本物だと言ったり…
…いいわ。私だって、元・サイキックファイブのファンクラブ会員、
ゴールドサイキック会員だった人間だもの。一ファンとして見届けて
あげようじゃない。」

日之出 「…何だと?」

石原 「証明してみせて、今、ここで。あなた達が本物の超能力者であることを。
…力を見せて、て言ってるの。」

間。

鳥村 「なるほど…」

坂崎 「どうする…っ。」

日之出 「俺は、もう今日は無理だ。」

宮永 「いいわ。見てなさい。(くわ!)」

日之出 「… 何でいつも俺!」

宮永、日之出を使って大いにテレキネシスを使いまくる。

鳥村 「ちよつと、ミーヤ、やりすぎ!」

日之出 「ミーヤ! やめろ! 折れる折れる!」

鳥村 「駄目よそんなはしたない!」

等など。

宮永 「どっっ。」

日之出 「これで納得したろ?!」

石原 「…よくできた組み体操ね。」

日之出 「くそ!」

宮永 「これじゃ駄目か!」

鳥村 「ミーヤ、」

宮永 「分かってる。じゃあこれはどう? 今から、あなたの心の中を読むわ。」

石原 「どうぞ♥」

宮永 「(くわ)…読めたわ。あなたは、私達のことをこれっぽっちも信じていない!」

石原 「当たり前。」

鳥村 「そりやそうね…」

宮永 「え? 何で駄目? 今の。」

坂崎 「俺が行こう。」

三人 「アルフィー!」

石原 「千里眼のアルフィー、お手並み拝見♪」

日之出 「エンジョイしやがって。吠え面かくなよ!」

坂崎 「失礼。今から、あなたの鞆の中を透視させて貰います。」

石原 「どうぞ♥ 光栄です。」

坂崎 「(くわ) …見える…見えます。…中には、手帳、名刺入れ、半分食べたチーズ味のカロリーメイト。携帯電話…ストラップは、ぜんまい侍のぬいぐるみ。頭のぜんまいのフェルトが剥がれかけてます。」

石原 「す、凄い、全部その通り！」

日之出 「やった！」

鳥村 「凄い、アルフィー！」

石原 「ていうか、さっきあたしが気を失ってる時に見たんじゃ？ どーせ。」

4人 「へ？」

石原 「いくらでも中を確認する時間あったものね。」

宮永 「なんてひねくれた女なの？」

鳥村 「違います、石原さん、今のは本当にアルフィーの能力、」

石原 「証拠にはならない。」

日之出 「てめえ！」

坂崎 「(くわ)きえーい！(ブルブル)

鳥村 「！アルフィー?!」

宮永 「アルフィーが遂に本気に！」

日之出 「吠え面かくなよ！」

石原 「……。」「(ゴクリ)

坂崎 「見えた…。」

鳥村 「どう？ アルフィー、」

坂崎 「問題ない…綺麗な内臓だ！」

宮永 「何を見ているの?!」

坂崎 「小腸まで、サラッサラだ！」

日之出 「(舌打ち)健康ってことか！」

石原 「…あ、どうも。」

日之出 「良かったな、怪しい影が見つからなくて。このヘルシー指向のエコ野郎め！」

石原 「エコは、別に…」

宮永 「ちよっと！ そんなんじゃ力を証明したことにならないでしょ?!
どーまで見てんのよ！ もっと、表面見なさいよ！」

坂崎 「でも…」

宮永 「嫌がらない！ 私達に力があるってこと、認めさせるんですよ！」

坂崎 「…失礼。きえーい！」（くわ！ ブルブル）

石原 「何?！」

鳥村 「…ご免なさい。申し訳ないけど、あなたの下着を透視させて貰うわ。」

石原 「な！」

宮永 「これで納得するでしょ?！」

坂崎 「きえーい！ はー！ …見えた！」

石原 「…（ゴクリ）」

坂崎 「ヒョウ柄の…Tバックだ！」

間。

鳥村 「まさか！」

日之出 「どういづつもりだ?！」

鳥村 「アルフィー?！」

坂崎 「見間違いないじゃない…？ ゴールドのヒョウ柄だ！」

日之出 「…何が真ツ当な人間だよ！」

宮永 「…」一番の時しか身に着けないようね。かなりお気に入り。」

日之出 「戦闘態勢ってことか！」

鳥村 「私達をどうするつもり?！」

間。

石原 「…履いてません。」

4人 「！」

坂崎 「嘘だ！」

石原 「やっぱりインチキね。」

日之出 「な！」

宮永 「何が何でも、ヒョウ柄Tバックは認めないつもりね。」

鳥村 「卑劣な人…！」

日之出 「所詮、マスコミの人間か！」

石原 「駄目ね。結局、証明不可能、と。」

宮永 「こうなったら…アルフィー！」

坂崎 「はい！」

宮永 「焼きうどん 十人前！」

坂崎 「任せとけ！」

石原 「それは超能力じゃない！」

宮永 「おかわり、じゃんじゃん持って来て！」

石原 「ふざけないで！」

宮永 「証明してみせる！」

石原 「それは…病気でしょ?！」

宮永 「失礼ね…！ れっきとした超能力よ！」

石原 「どんな?！」

宮永 「テレポーテーションで、食べたものを異次元に飛ばしているのよ。」

石原 「嘘！ 嘘でしょ絶対！ めっちゃ蓄積されてる！ 体に！」

日之出 「…ようこそここへへへへ」(辛さを押し殺し)

石原 「歌つても駄目！」

日・鳥 「遊ぼろよ サイキックッ」(二人泣きながら)

石原 「踊つても駄目！」

日之出 「そんなに駄目駄目言われたら、僕達もやる気なくしちゃうよな、」

三人 「うんうん。」

石原 「子供ぶるな！」

宮永 「どうあつても認めてくれないのね。」

石原 「当たり前。あなた達はインチキよ。ホラ、証明できないじゃない何一つ。あなた達は、只の一般人。超能力者なんかじゃない。私とおんなじ、平凡な一般人！」

坂崎 「お前と一緒にされたくない！」

石原 「うるさい！」

鳥村 「そうか…石原さんは…最初から、私達を偽物だと確認するために、
ここに来たんですね。初めから、インチキだと暴露記事を書くために…。」

石原 「…。」

宮永 「イエス、だって。」

日之出 「何が目的で、」

宮永 「待つて…(?!) 何…この、ドス黒い感情…憎しみ…強い憎しみが見える…
何これ?! 憎しみや哀しみ、苦しみが渦を巻いていて…何も読めない!」

坂崎 「彼女の中に、俺達への憎しみがあるってことか?!」

鳥村 「どうして?! そんな…」

日之出 「俺達が何をしたって言うんだ!」

石原 「…あなた達は…イカサマ師よ。みんなに夢を与え、散々夢中にさせて、
陶酔させて…騙し続けた。超能力なんて初めからないのに…存在しないのに…
日本中を騙し続けた…。ふざけたペテン。…CDを買わせ…ファンクラブにまで
入会させ…あなた達みたいになりたいと思った、無垢な少年少女の夢を
踏みじった…! その罪は軽くはない…! 認めなさい…私達は、ペテンだと…
ずっと、嘘をついていたと…超能力なんて、この世に存在しないんだと!!」

鳥村 「違う! 私達は本物! 超能力は、ちゃんと実在する!」

石原 「だったら!! どうして私には力が目覚めないの!!!」

間。

4人 「…は?」

坂崎 「今…なんて言った? 彼女。」

鳥村 「石原…さん?」

石原、鞆からキットを取り出す。

鳥村 「それ…!」

日之出 「超能力開発キット…!」

坂崎 「しかも相当使い込んでる…!」

石原 「一昨年まで、日課だったわ…。」

鳥村 「…18年も…!!」

宮永 「泣いてる。」

鳥村 「へ。」

宮永 「彼女の心が、泣いてる。」

石原 「…九才の頃。あなた達をテレビで見たのは。眩しかった。憧れた。あなた達のようにになりたい、心から願った。ミーヤになりたいと思った。でも…私以上にサイキックファイブにのめり込んだ人間がいた…父よ。」

間。

石原 「父は…あなた達を見て、私にも超能力を見に付けるよう求めた。

…お前も目覚めるんだ。あの子達のようになるんだ。お前も超能力アイドルになって、金を稼ぐんだ…！ このキットを買い与えられ…毎日毎晩、何時間もやらされた。私が嫌がると、スプーンでぶたれた。…私も、必死になって練習した。もはや、サイキックファイブになりたいとか思わなくなっていた。この拷問から解放されたい、それだけが望みだった。父の命令で、私は来る日も来る日もこれをやらされ、スプーン曲げに挑戦させられた。いつまでたっても力に目覚めない私に、父は“危機感が足りない”でことで、バンジージャンプをやらせたり、嵐の海に投げ込んだりした。」

宮永 「よく生きてたわね。」

石原 「でも…勿論、力には目覚めなかった。」

鳥村 「その…お父様は？」

石原 「死んだわ。私に超能力が無いと諦めた時、自分が目覚めようと思ったんでしようね。真冬のオホーツク海に…！」

4人 「…」

石原 「あなた達が殺した！」

日之出 「それは違うだろ！」

石原 「当然ね。目覚めなくて。嘘なんだもの。初めからないんだもの…馬鹿だった…。踊らされたのも、ピエロだったのも私！ 18年、必死に練習して…。償ってもらおうわ。私の家庭と、私の人生をメチャメチャにした償いを…！」

坂崎 「だから僕達は本物！」

鳥村 「(泣) うわわわわー…ん。」

日之出 「あずき?!」

坂崎 「どうした？」

石原 「…何？」

鳥村 「…かわいそう、あなた。…石原さん、失礼なこと言ってご免なさい…

人の痛みの分からない人間なんて…誤解してた…あなたは、下着の趣味以外 私達と同じ！」

石原 「下着も一緒です。」

宮永 「何が言いたいの、あずき。」

鳥村 「良いわ… 石原さん、本当のことを話してあげる。」

坂崎 「あずき?!」

石原 「…本当のこと?」

鳥村 「…リーダーのこと。」

日之出 「馬鹿野郎!」

坂崎 「やめるんだ、それを話したら!」

石原 「…リーダーのこと? 話してくれるの、真相を?」

鳥村 「ええ。」

宮永 「いいの? あずき。それを話したら、あんだ、」

鳥村 「はじめ。」

石原 「…聞かせて貰える?」

鳥村 「…さっき話したこと。」

石原 「リーダーは悪魔で、ひどいヤツだった。」

鳥村 「それは、本当なんです。リーダーは元々、支配欲の強い小学生でした。自分の力を使って…私達を服従させ…その傾向は日に日にエスカレートし、20年前、遂に頂点を迎えました。リーダーは、アイドルでいることに飽き足らなくなり…!」

日之出 「あんたの言った通りだよ。そんな力があるやつは…世界の王様になろうとするのさ。」

石原 「まさか…!」

鳥村 「リーダーは、芸能界を飛び出し、世界を征服しようとしたんです!」

石原 「馬鹿な。いくらものを燃やすことが出来るからって…!」

坂崎 「あの頃、リーダーの力はどんどんパワーアップしていた。森を一晩で焼き払い、ダムの水を一瞬で蒸発させるほど。」

石原 「…そんなに…!」

宮永 「私達は、必死で説得した。」

日之出 「ヤツは聞く耳持たなかったけどな。」

坂崎 「俺に怖いものなどない！ 世界中の人間を俺の前にひざまずかせてやる！」

石原 「…それで？」

鳥村 「あの解散ライブの後…楽屋で、私達の決裂が決定的になり、」

宮永 「その場で、私達は対決した。」

日之出 「4対1だしな。勝算はあった。」

石原 「…で、あなた達は勝った。」

坂崎 「痛み分けです。俺達は、リーダーを倒すことは出来なかった。ギリギリ…」

全員あずきに注目。

石原 「…テレポーション。」

日之出 「あずきの最大限の力で、リーダーを移動させた。」

石原 「どこに…？」

鳥村 「この次元じゃない、どこかに。」

間。

石原 「…は？」

坂崎 「次元の壁を超える程の力を使ったあずきは、それ以来“力”を使えなくなった。」

日之出 「今じゃ、ちよびとテレキネシスが使えただけだ。」

石原 「ちょっと待って…じゃあ、リーダーは、」

鳥村 「生きてはいます…恐らく。」「じゃない、別の次元で。」

間。

石原 「ひざまずかないで…」

鳥村 「ふざけてません!」

石原 「そんな馬鹿な話、信じられない!」

日之出 「本当だ!」

石原 「リーダーが?」

坂崎 「そう。リーダーは今も、別の次元を漂っている。」

石原 「別の次元?!」

鳥村 「三次元じゃない、どこかに。私も分かりません。無我夢中だったから…」

日之出 「あずきのせいじゃねえよ。」

鳥村 「本当は…増長するリーダーにお灸を据える程度のもりでした…でも、戦いがヒートアップしすぎて…思わず、」

宮永 「仕方ないわ。やらなきゃこっちがやられてた。」

鳥村 「その結果、リーダーを元に、こっちの世界に戻せなくなっていました…」

坂崎 「次元の壁を超える程の力だ。よっぽどのエスパーでもない。空っぽになったあずきや、俺達には無理だ。」

間。

石原 「…ひどい。」

鳥村 「仕方なかったんです!」

坂崎 「あずきを、責めないで下さい。」

石原 「責めてない!…何?! その子供じみた嘘!」

日之出 「恐ろしい話だけど、真実だ。」

宮永 「感謝して。私達が世界を救ったのよ。」

石原 「いい加減にして! 大体、その超能力の証明もそもそも出来てないじゃない

あんた達!」

日之出「おめえが信じないだけだろ、」

鳥村「石原さん、」

石原「ふざけないで! 次から次へと妄想してみた話…。もう良いわ。分かった。そうやって嘘やホラ話で塗り固めようとするところが何よりの証拠よ! あなた達はインチキのイカサマ集団よ! サギ師よ! 大嘘つきよ! 記事にしてやる。20年前のことも、現在のあなた達のことも、日本中、みーんな騙されてたつてことも! 超能力なんて、初めからなかったつてことも! ……………!」

稲妻が走る。雷鳴。

全員「(悲鳴)。」

間。

石原「? 何? 突然…。」

坂崎「…今、光らなかった?」

日之出「雷だろ?」

坂崎「いや、外じゃなくて…彼女。」

三人「…(石原を見る)」

石原「何?!」

突然、ランドセルが落ちてくる。

全員「!!」

宮永「…何?!」

日之出「急に、降って来たぞ、何か?!」

石原「え?」

宮永「降って来たつて、どこから? 屋根があるのに?」

日之出「だって、どう考えたつて、」

鳥村「突然、現れたつてこと?」

日之出「テレビポーション…。」

宮永 「ちょっと、アルフィー！ 何なの?！」

坂崎 「…ランドセルだ…」

間。

石原 「ランドセル?! どうしてそんなもの…」

宮永 「誰の…?」

坂崎 「(ー) …(ゴクリ)…リーダーのランドセルだ。」

間。

石原 「はあ…?」

鳥村 「間違いないの、アルフィー?！」

日之出 「そうだ、本当にリーダーのもので間違いないのか?！」

坂崎 「間違いない…『五年一組、ナカジマタケル』」

宮永 「リーダーのね…!」

日之出 「まさか?! どうやって次元の壁を…(ー)!!」

4人、ゆっくり石原を見る。

石原 「…(気付き)…えええええー!」

坂崎 「目覚めた…!」

日之出 「なんて…った!!」

鳥村 「石原さん、あなた…」

石原 「今更?!」

宮永 「恐ろしいものね。継続は、力。」

坂崎 「一人で次元の壁をこじ開けるなんて…どれだけのパワーを秘めているんだ!」

石原 「本当? 本当に私?」

鳥村 「他に考えられないわ。」

石原 「だって、今まで一度もそんな、表れたことないのに!」

宮永 「強い感情の力によって、能力が一気に目覚めたのね。」

鳥村 「凄いわ。石原さん…! おめでとう!」

日之出 「やったな。これで真正正銘、普通じゃない人だ!」

石原 「私？ 本当に私？ 嘘、私、超能力者?！」

鳥村 「やってみるといいわー！」

石原 「…(フン)」

日之出 「おー！ おー！ おー！…(と、弾き飛ばされる)」

坂崎 「…間違いない。」

宮永 「あんな軽々と…私以上のパワーね！」

坂崎 「なあ！ 体重に比例するはずなのに…。」

石原 「そんな…まさか…私が…私に…力が！」

宮永 「やったわね。」

鳥村 「おめでどう…。石原さん、あなたの一途な思いが、超能力を、遂に目覚めさせたのよ!!」

石原 「やったわ…ついに…ついに…20年かけて…！」

日之出 「お父さんも喜んでる。」

鳥村 「凄いわ。石原さん、あなたは、紛れもない超能力者よ！ それも、尋常じゃないパワーを秘めた！」

石原 「ハハ…ハハハ、ハハハ(高笑い)——!! やった！ ついに力が！ 力を手にしたわ！ 20年待ち望んだ力を！ ハーッハッハッハ!!」

4人 「おめでどう(口々に)」(拍手)

石原 「ハーッハッハッハ!! 凄い！ 超能力よ！ 超能力者よ私は！ さあ！ 私に怖いものなど何もないわ！ 世界中の人間を私の前にひざまづかせてやる!!」

全員 「(歓声)」

石原 「歌おう！サイキック銀河!!」

間。

4人 「それは嫌。」

終。

連絡先

一般社団法人 劇団弦巻楽団

北海道札幌市中央区南11条西9丁目
あけぼのアート&コミュニティーセンター 8号室

メールアドレス .. tsurumakigakudan@yahoo.co.jp

電話番号 .. 090 1 2872 1 9209